

4/15(水)

①バレエ解剖学「トゥシューズ」プロローグ

皆さんお元気でお過ごしでしょうか？ 一日何回も手を洗っているのですぐに一度も荒れた事のない手首がガサガサで荒れています。つまり今までは手首なんて洗っていなかったのですね...

さて今日はトゥシューズです。

私が幼かった頃はトゥシューズを早い年齢から履く傾向にありました。早くて小学1年生からという事も珍しくは有りませんでした。当時の海外のバレエ教育はどうだったか知りませんが、日本の芸事は幼いうちから仕込むという風習があるのでそうなったのかもしれませんが。

数年前の神奈川県芸術舞踊協会の会長でいらした小倉礼子先生のご葬儀で、ある先生が弔辞をのべられました。戦後のバレエダンサーたちはまだまだ日本にバレエの情報が無い分、現在とはまた違った白熱してバレエにとりつかれていらした事が伺える内容でした。バレエ教育によってではなく、主に来日公演を観たり、また当時渡航された先生が海外で習ってきたものを記録し日本のダンサーに伝えたりと、手探りながらも日々切磋琢磨していらしたとの事。

ある日小倉先生が、みんなとは違う靴を履いていらした...みんな「あれは何だろう?」と見ていると、小倉先生はその靴でつま先立ちで踊りだした...「なんて素敵なんだろう!!あの靴はどうなっているのか?あの靴はいったいどこに行ったら手にはいるのか?」と周りの人たちはずいぶんざわついたそうです。少し後になって銀座の「ヨシノヤ」と言う靴屋さんにあるらしいとの情報でみんなで慌ててお店へ行き「その靴」を手に入れた...それが実は「トゥシューズ」だったのでした...と言うものでした。これがまだ100年弱前の日本のバレエ環境です。この短期間にバレエと言う海外芸術がものすごいスピードで日本に流れ込み発展していったことが分かりますね。当時の先人たちが手探りで研究を重ね、バレエに対する情熱の日々を送られて来たからこそ、今の日本のバレエ文化も世界と肩を並べるまでになったのだと思います。

そして今日のバレエ教育はどんどん進化し、本来の秩序あるものになりつつあると感じます。その中心にあるのが「バレエ解剖学」だと思います。みようみまね、あるいはまたぎきの中で発展していった時代から、理にかなった方法でバレエをより正しく習得する時代へと発展しました。当時の先生方の中にはやはりどうしても身体に無理をさせてしまい、晩年、後遺症に見舞われる先生がいらっしゃいます。それは日本での浅いバレエ史の中でより情熱をかけて頑張ってこられた証でもあるので勲章ともいえることかもしれません。しかし今の時代(のダンサー)にあっては、怪我を勲章と言ってしまうのはもう違う時代なのだと思います。沢山のより正しい情報をしっかり勉強をして、その技術を習得して行くべき時代となりました。つまりバレエ教育者の責任は重大となりました。←これは有梨先生の事です(泣)。

...では次回はもう少しトゥシューズについて突っ込んでいきます。